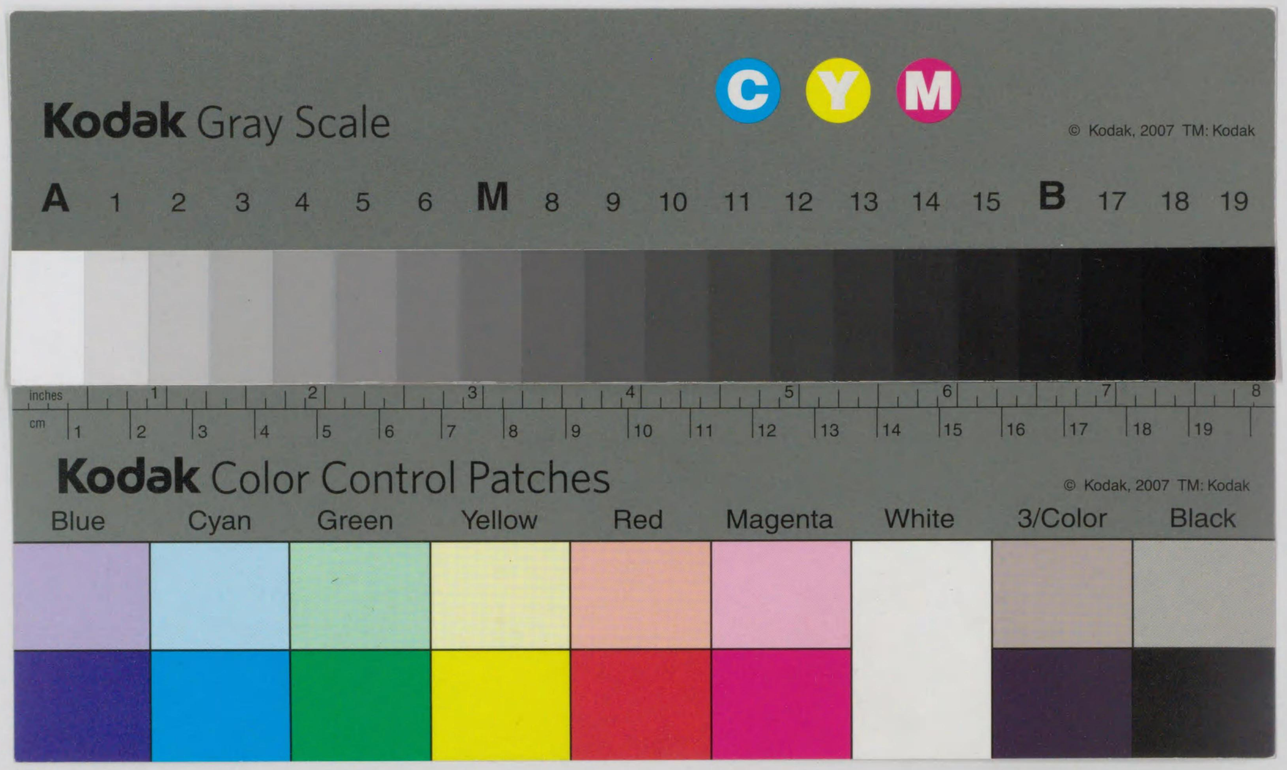


576
121
576-121
12005015201109
0 複写

576-121

江戸時代 古版地圖集解說

本會主催御大典奉祝古繪圖展覽會記念として、陳列品中最代表的な版圖九種を選び、これに伊能忠敬の實測圖を附して印行するに至つた。唯枚數に限あるため、世界圖・日本圖・町圖・交通圖各二種と、地方圖一種を取り、伊能忠敬の實測圖を以て國圖に代へることとし、その他猶これに加へたいと思ふ優品も少くないが、總て割愛せざるを得なかつた。

第一　萬國總圖　附四十國人物圖

堺市　前田長三郎氏藏

兩圖は一雙の屏風に仕立てられて居り、木板に筆彩色を施したものである。萬國總圖は刊記を缺くが、人物圖と同時代の長崎板と思はれ、現存する我國刊行世界圖の最古であらう。圖形の比較的正しいは、東洋の記載の簡單であると共に、西洋渡來の圖を直摸したためであらう。寶永五年の萬國總界圖は本圖に東洋の地名を增補したものに過ぎぬが、圖形は却つて甚しく崩れ、鎖國後に於ける世界地理の知識の退化を示して居る。

四十國人物圖は後西川如見がこれを增補し、圖說を附して刊行した四十二國人物圖說によつて、假にかく名づけたが、或は萬國人物圖と稱したかも知れぬ。後者はこの中の日本、アメリカ、ウンガリを除いて、大淸、琉球、モウル、アガレカを加へたものである。縱四尺五寸、橫一尺九寸八分、「正保丁酉季春吉辰、於肥州彼杵郡長崎津開板」の刊記があるが、丁酉は二年乙酉が、四年丁亥の誤である。

第二　輿地全圖

廣島市　淺野圖書館藏

我國銅版の創始者たる司馬江漢の寬政四年に刊行した所で、我國銅版地球圖の始であると共に、蘭學の勃興に伴ふ世界地理の知識の復活の端を開いたものである。經緯線は記入せられて居るが、度盛を缺

き、西半球は地名の記入僅に八つに過ぎぬ。藍、黄、赤、淡紅、淡綠等の筆彩が施されて居る。圖幅各縦一尺八寸四分、横一尺五寸四分、左の刊記がある。

寛政壬子春二月、日本銅板創製東都芝門司馬江漢峻寫並刻。

猶箱蓋の表には、「天子國日本東都春波樓主人著」とあり、蓋裏には、天球圖、地球楕圓圖等十數種の刊行目錄を掲げ、芝の新錢座を神僊坐と記して居る如き、彼の思想と意氣とを察するに足る。

第三　日本國之圖

京都帝國大學圖書館藏

所謂行基圖の系統に屬するもので、「干時慶安四歳辛卯孟秋良日」の刊記があり、刊本日本圖の最古と思はれる。唯國の方角を示すのみで、全く形を成さず、松前、志摩は共に小島とせられて居る。地點を示すに城下と否とに拘らず城の形描き、地名を記さないものもある。右方には諸國の石高、長崎より異國への道法を掲げ、終に「唐ノ廣サ日本八ッ合タル積云、男數十九億五萬四千八百人、女數二十三億二萬二千人云々」と記して居る。唐を我八倍とするは六十餘州と四百餘州との比であり、男女數の億は十萬である。縦三尺六寸六分、横一尺七寸二分で、彩色はない。

第四　扶桑國之圖

廣島高等師範學校歷史教室藏

刊本日本圖中前者につぐものであり、大躰形を成す最初であらう。但その杜撰は甚しく、南に羅剎國（此國女ばかりすむ、男行ぬれば二度不歸）東に「ゑぞのちしま」、北に雁道（此國之人形人にあらず）を記すは別とするも、仙臺と南部、佐倉と古河、山形と酒田、長岡と新發田、丹波龜山と福智山、津和野と濱田、和歌山と新宮、小倉と中津等が互に入違になつて居り、烏羽を鳥田、久留里を「くさり」、丸岡を左岡、弘前を佐竹、德山を濱田、熊本を萩戸、宇土を八代、八代を熊本と誤つて居るは餘に甚しい。因に元祿九年板の日本之繪圖は本圖を縮めたもので、入達の誤記四組を訂正して居るに過ぎぬ。下方には諸國石高、道・國・郡・鄉の數、京から陸奥・長門へと、長崎から異國への道法を記して居る。「寛文二歳九月吉日伏見屋」の刊記があり、縦二尺二分、横二尺九寸で、彩色はない。但家藏本は朱・綠・黄・白・藍及び赭の筆彩色がある。猶本圖の海に墨を塗り、國に朱の丸を附したのは、後世の仕業である。

第五　蝦夷國全圖

廣島高等師範學校歷史教室藏

有名な林子平の三國通覽の一部である。包紙には「三國通覽輿地路程全圖　共五紙　略說一冊」とあり、この外三國通覽輿地路程全圖、朝鮮國全圖、琉球國全圖、無人島之圖及び三國通覽圖說を併せて一部を成すものである。本書は自跋中に經濟の書でなく、武門の奥旨とせる如く、この三國を併して國防を完成すべく、武士の三國に渡る際その地理を知らねばならぬために著したものであるが、その圖說に於て朝鮮四枚、琉球七枚、無人島三枚半を以てしたに對し、蝦夷には三十三枚を費して居るのでも、その最力を致したのが蝦夷にあつたことが知られる。蝦夷は自ら古くから所有した一圖に、新に得た三圖があり、これに白石の蝦夷志、淘金家（かねほり）の北海隨筆を以て考定め、北海舟人の說を交へ記すと序に記して居るが、その圖は殆ど形を成して居ない。併しこれ卽當時我國民の蝦夷に關する知識の幼稚であつた證據であると共に、彼が北門の警を高唱したことの如何に有意義であつたかを示すものである。本書の圖は皆「天明五年秋東都日本橋北室町三丁目須原屋市兵衞梓」の刊記があるが、圖說には桂川甫周の六年夏の序があり、圖說の刊記及び包紙にも天明丙午夏とあるから、實際は六年の刊行であらう。縦一尺八寸二分、横三尺二寸二分で、赤・黄・樺・綠及び藍の筆彩色が施されて居る。

第六　江戸圖鑑綱目

廣島市　栗田元次藏

江戸圖は寛永以來刊本を見、寛文の大繪圖以來分間の法を用ゐて漸く精確に向ひ、延寶八年の江戸方角安見圖の如きは七十八圖から成つて詳密を極めるに至つたが、今元祿の盛時を最詳記するものとして、

本圖を取つた。本圖は乾坤二卷より成り、乾卷には江戸方角圖、番町分誌圖、異名、神社、佛閣、諸師、諸藝、諸職、諸商人、舞能太夫、淨瑠璃太夫等を表示したもので、林鳳岡（八代洲河岸）、木下順庵（臺所町）、吉川維足（京橋）、（松尾）桃青、狩野常信（新橋鳥屋町）、菱川師宣（橘町）、和泉太夫（須屋町）、虎屋永閑（呉服町）、近江語齋（人形町）、肥前太夫（本大坂町）等もその中に見える。坤卷の圖は「元祿二春圖量作者畫工石川氏俊之」、板本相模屋太兵衞」の刊記があるが、湯島の聖堂が見え、知足院が神田橋外に移つて、まだ護持院の名のないことや、郭内に於ける大名邸から見て、五六年の修正板と推定せられる。西南隅に目黒不動、西北隅に板橋宿、東北隅に木母寺、東南海上に遊船を描いて飾とせることは、江戸圖の慣用手段である。本圖は記載甚詳密で、大名、旗本の邸、城内外の殿舍、城門、倉、番所、佛寺の堂塔、火見櫓、高札等明記せられ、尾張、水戸兩家の邸の如きは門や長屋まで記されて居る。河川の多くは防火と運輸を兼ねたもので、日本橋邊最著しく、神田銀町や、柳原の土手も防火用である。大手前には老中戸田山城守、土屋相模守、側用人柳澤出羽守、若年寄秋元但馬守等、西の丸下には老中大久保加賀守、阿部豐後守、側用人牧野備後守、若年寄內藤丹波守、加藤佐渡守等が並んで、當時の權勢を示して居り、吉良上野は鍛冶橋にその邸が見える。縱四尺二寸七分、横四尺五寸四分で、朱、淡紅、黄、綠及び藍の筆彩色がある。猶本書には有名な江戸の蒐書家達摩屋五一の藏印がある。又本圖の筆者石川俊之は流宣又は流舟と號し、萬國總界圖、日本山海圖道大全等多くの地圖を出して居る。

第七　唐人來朝圖長崎圖

廣島市　栗田元次藏

本圖は刊行年次を記さないが、附記せられた大名旅宿付と唐人屋敷の見えないことによつて、延寶六年から元祿元年に至る間の刊行たることが知られ、天和元年の書目に見ゆるものと察せられる。恐らく現存の長崎板圖中最古のものであらう。圖樣頗る繪掛つた所が多く、題箋に唐人來朝圖と記すだけに唐船、阿蘭陀船を描くこと最詳細で、寛文五年に沈沒した阿蘭陀船の圖まで示して居る。出島の蘭館、異樣な唐寺、立神、西泊の両番所、丸山の遊所も大きく描出せられ、晝夜の長短、潮の滿干を知る法や、異國人の圖と共に、長崎特有の異國情調を深からしめて居る。「（江戸）通油町松會開板」の刊記があり、縱二尺一寸三分、横三尺一寸六分で、朱、黄、藍及び綠の筆彩色が施されて居る。

第八　東海道分間繪圖

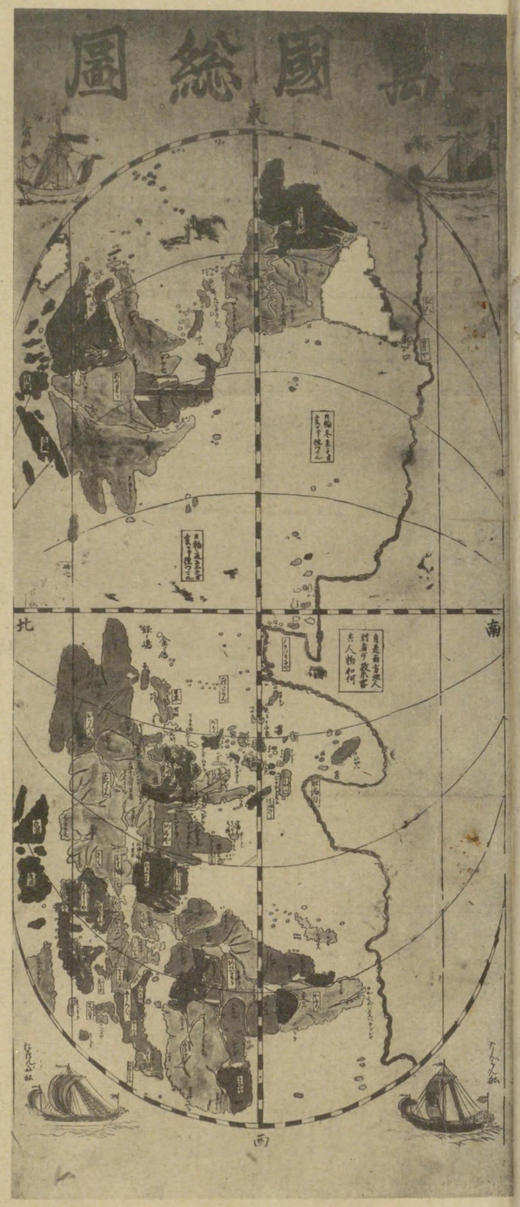
廣島市　栗田元次藏

道中圖中寛文十二年の東海道細見圖と對立するもので、年代に於ては後れるが、描寫の詳細に於ては遙にこれを凌いで居る。遠近道印作、菱川師宣畫で元祿三年板屋七郎兵衞の刊行に係る。幅一尺一寸二分、黄、綠、藍、赭及び朱の筆彩色が施されて居る。江戸より京に至る間の道法、宿村、名所舊跡は固より、道の曲折、橋の間數一里塚の榎や松の數、番所、町門、問屋、茶屋まで明示し、且各階級の旅行の狀況をも描いて居る。茲に收めた上圖は宮から桑名に至る七里の渡で、船を嫌ふものは宮から分れて佐屋廻したものである。宮の港口には燈臺があり、その右手に尾張家の御殿があり、その上手には熱田神宮が見え、遠くに金鯱を戴いた名古屋城の天主閣が描かれて居る。海上の幕を張つた船は大名の乘船であり、桑名には松平越中守の城や、陣屋、高札、道の曲折等が、詳しく寫されて居る。下圖は龜山から坂下に至る間で、龜山城下の町門、番所や、道の曲折、坂下からの鈴鹿峠の樣子が詳に描かれ、且先供既に龜山に入らんとして、殿の猶關の地藏を出切らぬ大大名の行列が寫されて居る。

第九　西國海路圖

京城　藤塚鄰氏藏

海路圖として寛文十二年の西海陸細見圖と共に雙璧とすべきものである。長さは兩者共に二丈二尺二寸で、幅は細見圖より稍狹く一尺であるが、細見圖は所々陸路をも描いて居るため、海路はこの方が遙に詳細である。綠の筆彩が施され、「延寶五丁巳年六月吉日、下立賣通、板木屋次郎右衞門板」の刊記が



第一　萬國總圖附四十國人物圖

ある。茲に示した上圖は安藝の忠海から周防の上の關に至る間で、海路の錯綜は内海海運の隆盛を示して餘ある。忠海から蒲刈、津和を經て上の關へ行くが本路で、本圖に津和より上の關へ十二里とあり、此外音頭瀨戸を通つて宮島に出る路や、伊豫の興居島から豐後の佐賀の關へ行く（こゞ島より佐賀の關迄八里）等を初め、寔に四通八達であり、佐賀の關までの七里の間横潮と記してあるのも注意すべきである。下圖は卷尾の平戸から長崎迄で、平戸から七釜、瀨戸、黒崎（瀨戸より黒崎迄廿里）、福田（黒崎より福田迄五里）を經て長崎（福田より長崎まで二里）に至るのである。長崎から唐船路を記して居るも興味がある。猶本圖には有名な京の藏書家村井古巖の藏印があり、彼が現所藏者の祖である鹽釜神社の祠官藤塚知明に贈つたものである。

第十　（附）實測安藝國圖　廣島縣廳藏

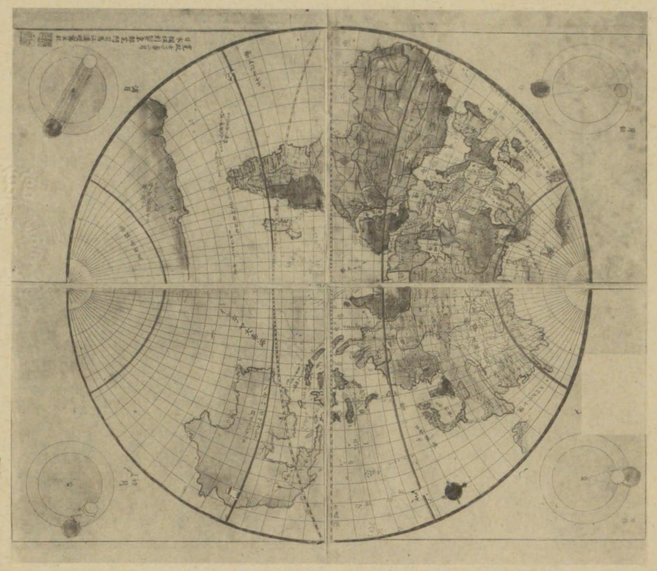
伊能忠敬の幕命を受けて全國の海岸を測量し、初めて精密な實測圖を作つたことは改めて言ふまでもない。安藝の測量は文化三年三月で彼の六十二歳の時に當たる。この圖は六枚續で、縱各一尺九寸四分、横一丈二尺七寸五分乃至三尺二寸の彩寫で、從來存在の知られなかつたものである。茲に出したは廣島附近で、城下を通る間の山陽道の曲折も精確に描出せられて居る。この邊は海岸の埋立が盛なため、今日地續たる江波が猶島であり、一橋を以て連なつて居る宇品が遠く海中に離れて居る等、滄桑の變を知る上にも興味が深い。猶本圖の印行は吳鎭守府の許可濟である。

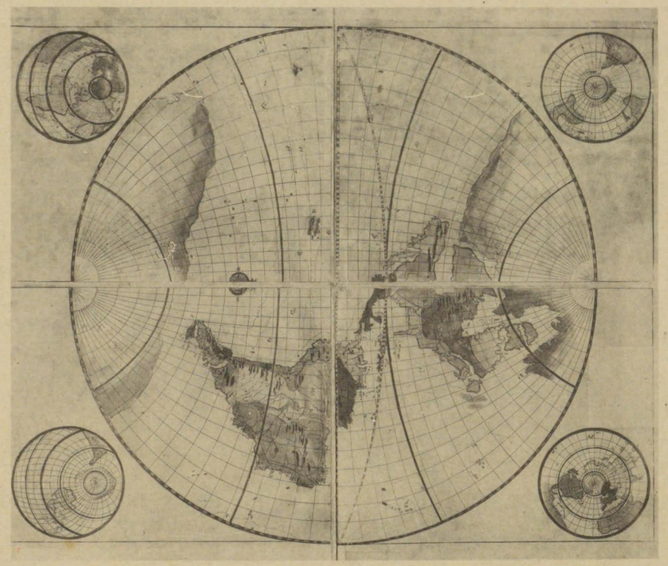
昭和三年十二月八日

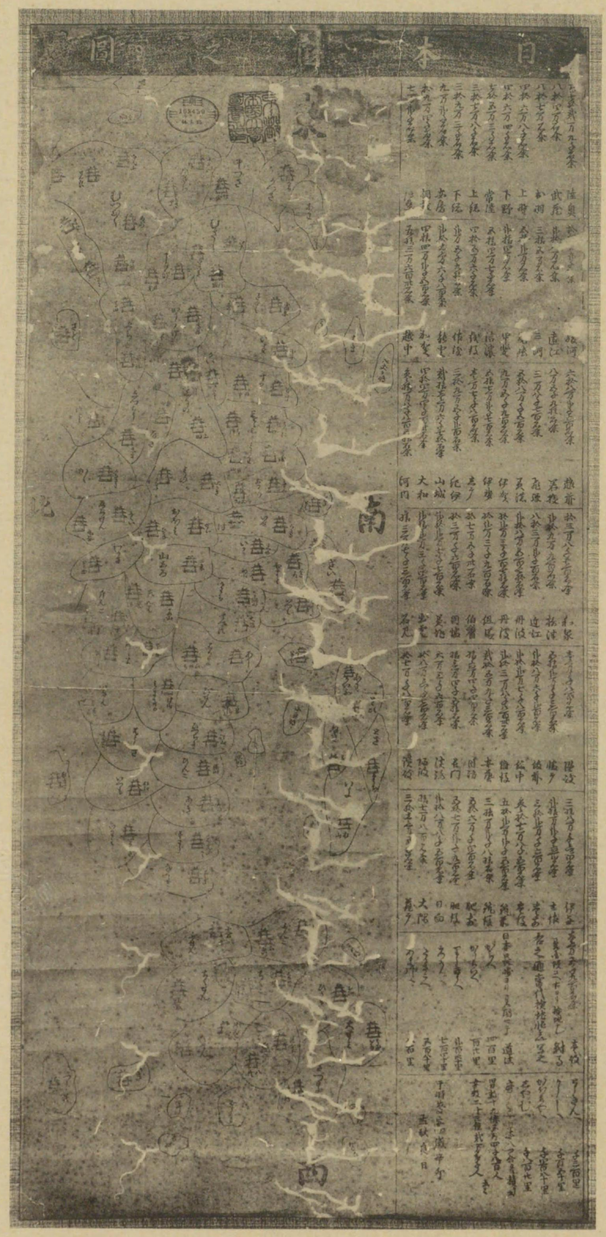
栗田元次記

圖全地輿

第二幅



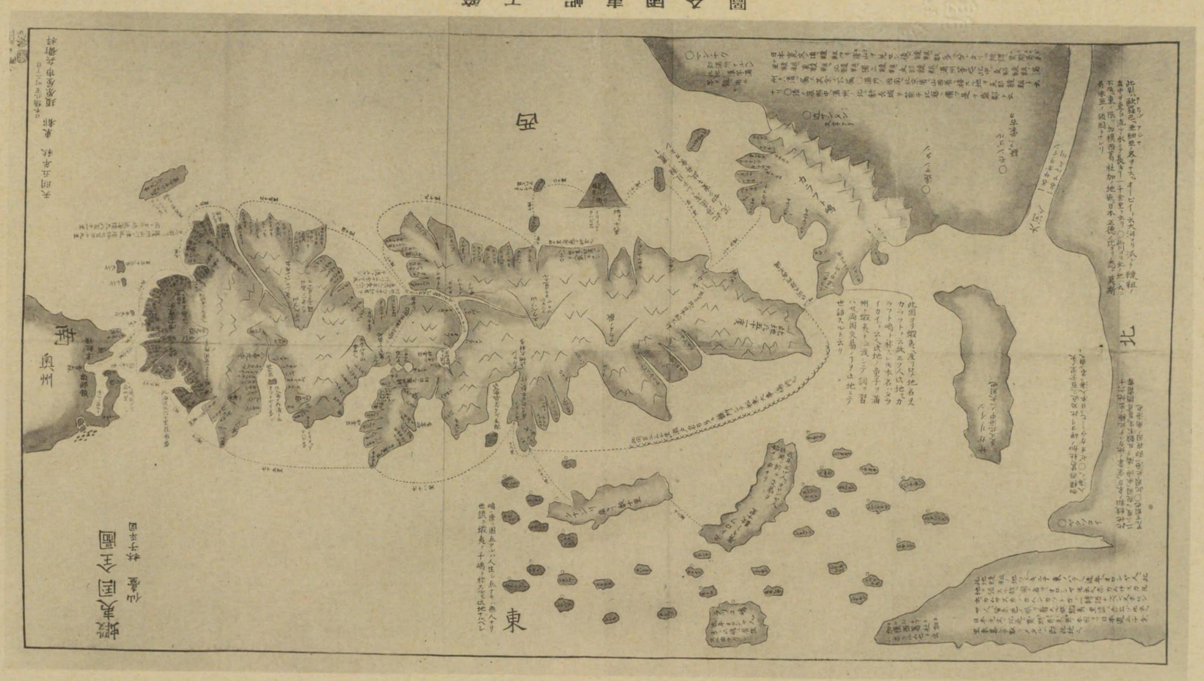


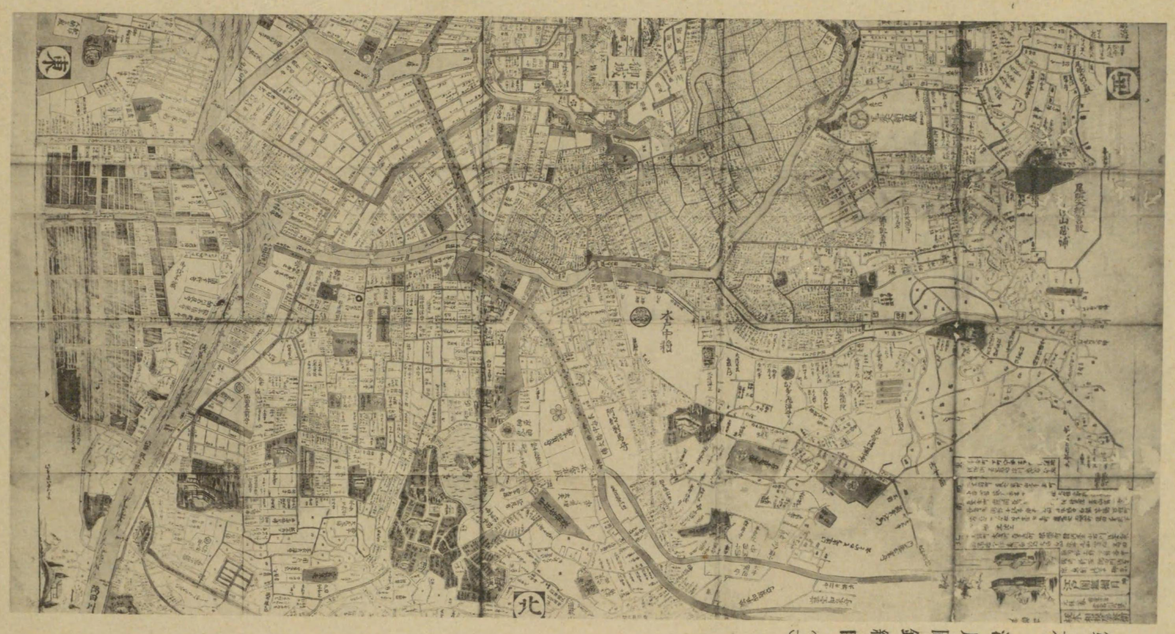


第三　日本國之圖

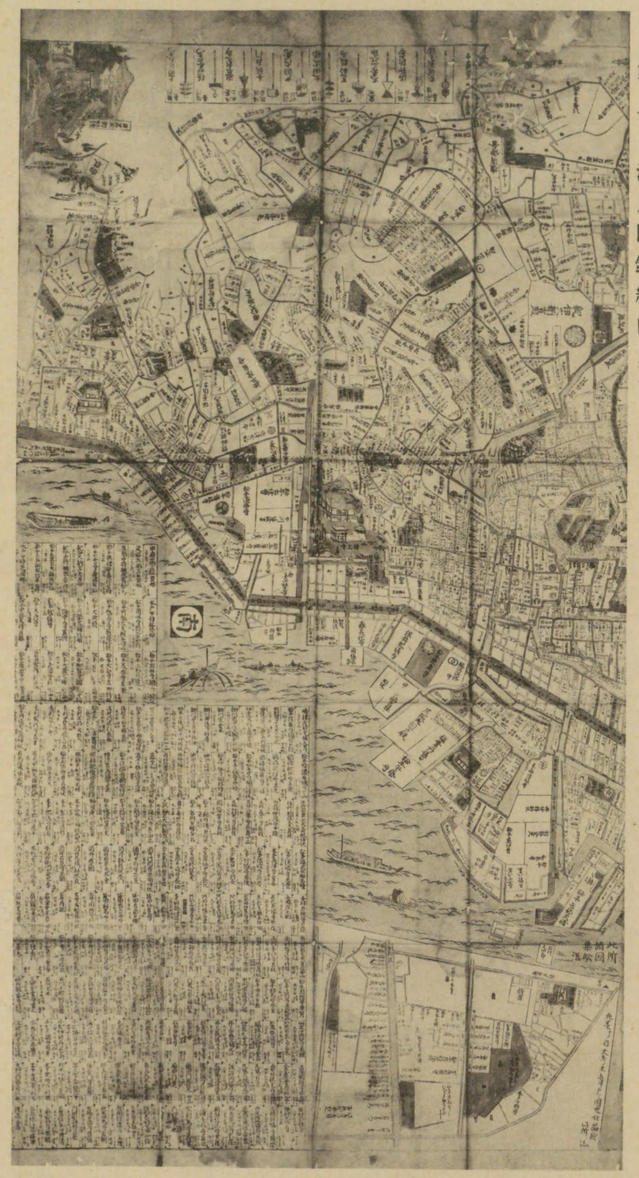
第四　扶桑國之圖

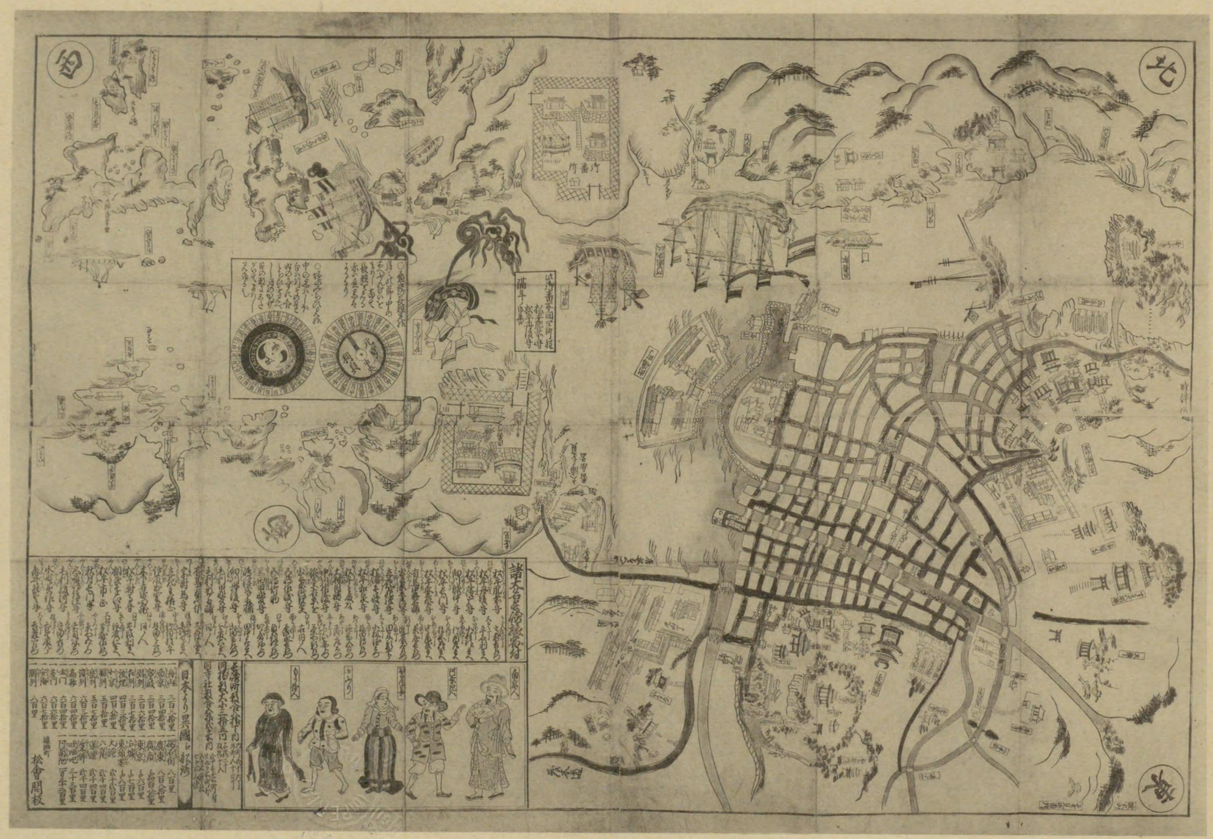
圖全國夷蝦　五第



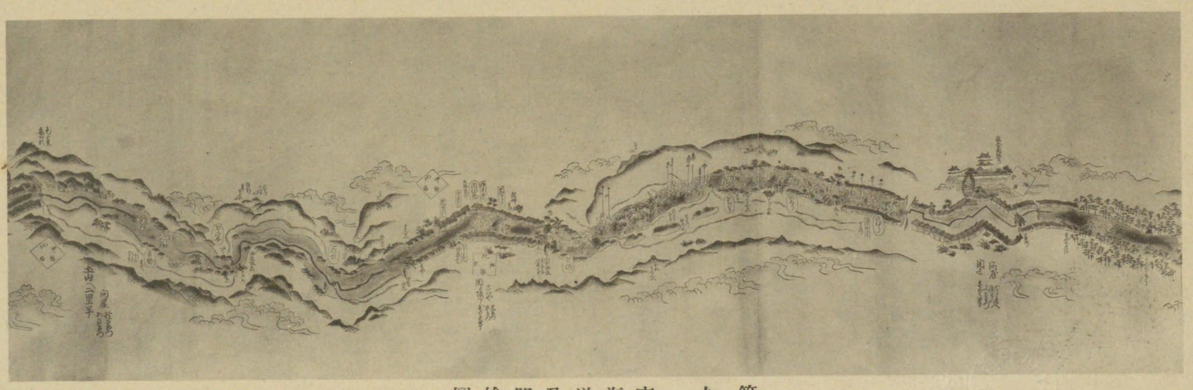


第六　江戸圖鑑綱目（上）

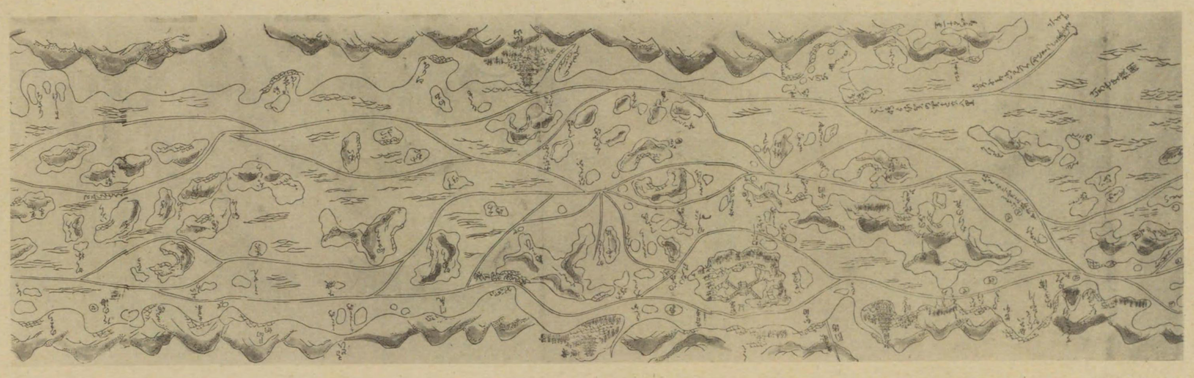




第八　唐人來朝圖長崎圖



第九　東海道分間繪圖



第十一　實測安藝國圖

57
12

昭和三年十二月二十日印刷
昭和三年十二月廿五日發行　【非賣品】

廣島高等師範學校地歷學會代表者
發行者　長倉矯介
廣島市鹽屋町十二番地
印刷者　增田直吉

576
121

576
121